

## 東北地区スモン検診：平成 28 年度結果と 9 年間のまとめ

千田 圭二 (国立病院機構岩手病院 神経内科)  
高田 博仁 (国立病院機構青森病院 神経内科)  
大井 清文 (いわてリハビリテーションセンター)  
青木 正志 (東北大学 神経内科)  
豊島 至 (国立病院機構あきた病院 神経内科)  
鈴木 義広 (日本海総合病院 神経内科)  
杉浦 嘉泰 (福島県立医大 神経内科)

### 研究要旨

平成 28 年度の東北地区スモン患者の現状を調査した。検診受診者は 53 (男 12、女 41；来所 35、訪問 18) 人であり、訪問検診率 34.0%は過去最大であった。平均年齢は 79.0 歳で、85 歳以上が 34.0%を占めた。平成 20 年から 9 年間の検診結果を比較することにより、東北地区スモン患者の動向として、高齢化と併発症の増加・累積、身体状況、日常生活動作および介護度の重症化、長期入院・入所と一人暮らしの増加、介護度は高まったが介護に関する不安は減少傾向にある、などが指摘できた。大腿骨頸部骨折は 9 年間で 1 件にとどまり、低頻度と考えられた。

### A. 研究目的

平成 28 年度の東北地区スモン患者の身体状況、医療、日常生活、介護・福祉などについて現状を調査し、東北地区スモン患者群について、その実態と研究班 3 期 9 年間における動向を把握する。

### B. 研究方法

東北 6 県の班員を中心とした検診担当者が各県のスモン患者に連絡を取り、平成 28 年 9~10 月に「スモン現状調査個人票」を用いて、会場検診または訪問検診の形式で実施した。地区リーダーへ各班員から送付された同調査票とスモン医療システム委員会から送付された集計資料をもとに、平成 20 年度以降のデータと比較しながら東北地区スモン患者の現状と動向を検討した。

### C. 研究結果

#### 1. 受診者と検診形態

平成 28 年度の東北地区スモン検診受診者は合計 53 (男 12、女 41) 人であり、年齢は 54~95 (平均 79.0) 歳であった。県別では青森 6 人、岩手 13 人、宮城 15 人、秋田 3 人、山形 12 人、福島 4 人であった。新規受診者はいなかった。検診形態は来所検診 35 人、訪問検診 18 (自宅 6、病院・施設 12) 人。検診率は 53.5% (= 総受診者数 / 28 年 4 月の支払対象者 99 人)、訪問検診率は 34.0% (= 訪問検診者数 / 総受診者数) であった。

20 年度からの 9 年間で、支払対象者は 56 人減少し、検診受診者は 22 人減少した (図 1)。増加傾向にあった受診率は 27 年度に 60.4%と最大を示したが、28 年度には低下した。訪問検診率は 20 年度の 16.2%から 9 年間で倍増した。85 歳以上の比率は 20 年度の 13.2%から 28 年度には 34.0%へと著しく増加した。

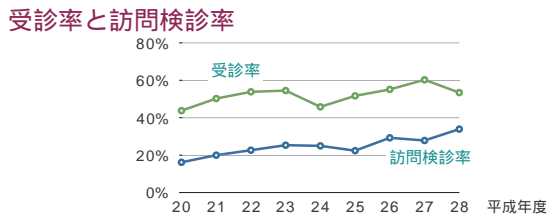
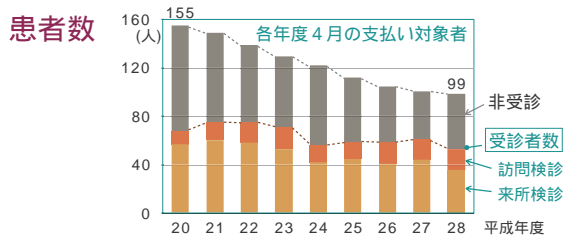


図 1

B-z. 診察時の障害度 C-a. 最近5年の療養状況

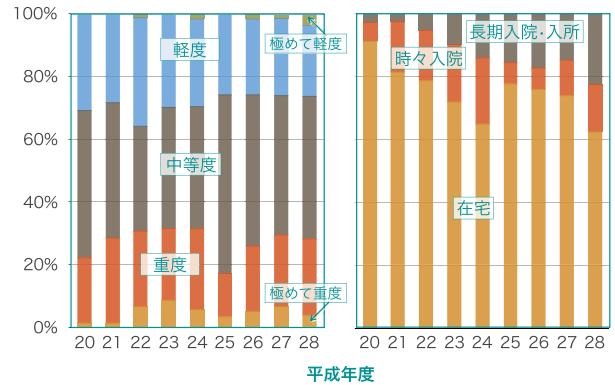


図 3

B. スモンの主要4症状

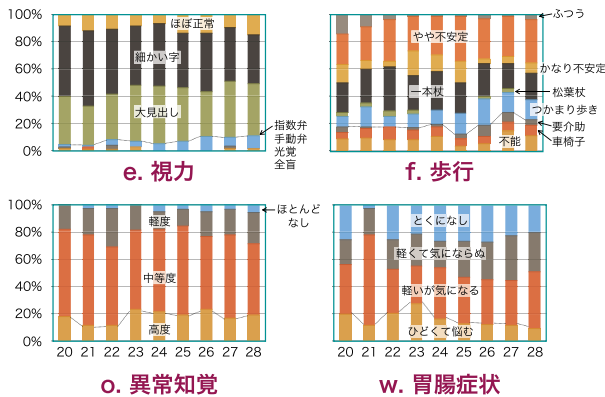


図 2

D-a. 一日の生活 (動き) D-b. Barthel index

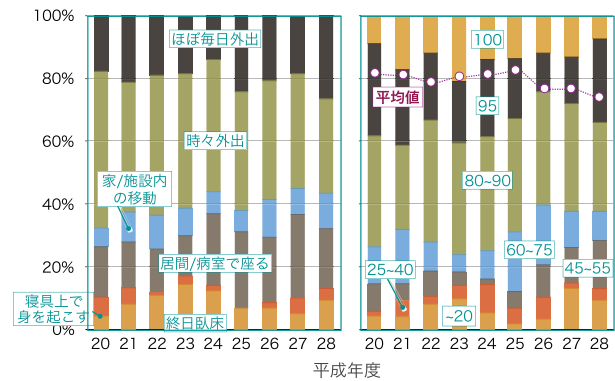


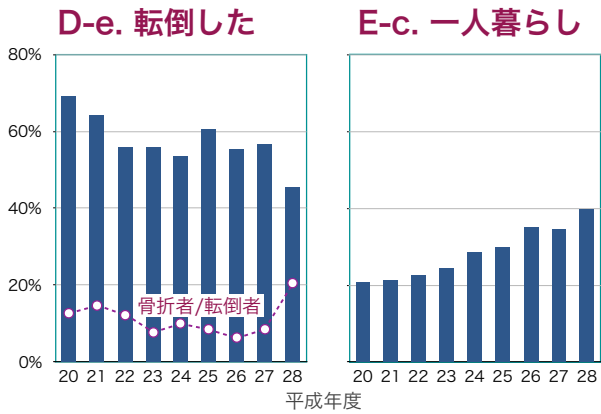
図 4

2. 身体状況と医療

スモン主要症状として、視力「全盲」～「指数弁」が11.3%、歩行「不能」～「要介助」が18.8%、異常知覚「高度」が19.2%、胃腸症状「ひどく悩んでいる」が9.4%であった。身体的併発症は全員が有しており、10%以上に影響のある併発症は白内障（22.6%）、骨折（17.0%）、脊椎疾患（13.2%）、四肢関節疾患（17.0%）、記憶力の低下（18.9%）、認知症（18.9%）であった。診察時の障害度は、極めて重度2人、重度13人、中等度24人、軽度12人、極めて軽度2人であり、障害要因はスモン9人、スモン+合併症37人、合併症2人、スモン+加齢5人であった。長期入院または入所の割合は22.6%であった。治療はスモンに対して18.9%が、合併症に対して73.6%が、それぞれ受けていた。

9年間で、スモン主要4症状のうち、視力障害は重

症の比率が漸増し、歩行障害も軽症が減少し重症が増加する傾向がみられた（図2）。異常知覚と胃腸症状には一定の傾向は見られなかった。併発症ありは94.6～100%ときわめて高率であった。検診時に影響がある併発症は、白内障、脊椎疾患が毎年10%以上であり、四肢関節疾患も10%以上であることが多かった。高血圧、心疾患、骨折および腎泌尿器疾患は10%以上を示すことがあったが年度によって変動した。認知症の割合は増加傾向にあった。なお、診察時の障害度では各カテゴリーの比率の変化に一定の傾向はみられなかった（図3）。一方、療養状況では長期入院または入所の比率が、20年度の2.9%から著明に増大した（図3）。治療を受けている比率は88～98%と高率であった。



▷大腿骨頸部骨折は9年で1件のみ

図5

### 3. 日常生活動作および介護

一日の生活（動き）は、「一日中寝床」5人、「寝具上で身を起こす」2人、「居間・病室で座る」10人、「家や施設内を移動」6人、「時々外出」16人、「ほぼ毎日外出」14人であり、Barthel インデックス（BI）は0～100（平均74.7）点であった。転倒は過去1年間に24人（45.3%）が経験し、骨折は5人に5件（膝、肩、肩、足趾、腰椎）起こった。一人暮らしは21人（39.6%）であった。

9年間で、一日の生活（動き）は「時々外出」の比率が低下し、それ以下の活動度の比率が増加する傾向があった（図4）。BIにおいても、年度による変動が大きいものの、重症化する傾向がみられた（図4）。転倒では、転倒者や骨折者の比率が減少傾向にあったが、28年度には転倒者率が最低となり、骨折者率が最大となった（図5）。骨折は9年で30件発生したが、大腿骨頸部骨折は1件に留まった。一人暮らしの比率は20年度の20.6%から徐々に増加し、9年で倍増した（図5）。

介護に関しては、毎日介護23人（43.4%）、必要時介護12人（22.6%）、介護者なし1人、介護不要17人（32.1%）であった。介護保険を申請していた32人の認定結果は自立が0人、要支援1が1人、要支援2が9人、要介護1が3人、要介護2が5人、要介護3が8人、要介護4が3人、要介護5が2人であった。将来の介護について不安を抱いている人の割合は59.6%であり、不安の主な理由で多かったのは順に「介護者の疲労や健康状態」29.0%、「身近にいない」19.4%、

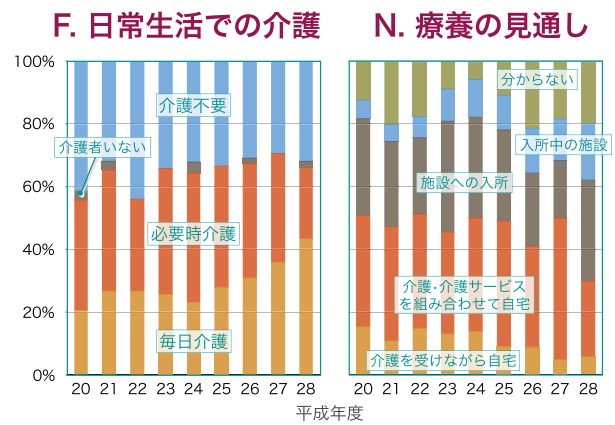


図6

### M. 介護への不安

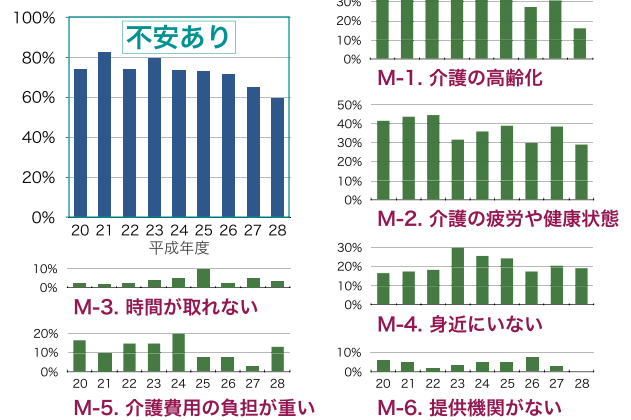


図7

「介護者の高齢化」16.1%であった。介護が増大した場合の見通しは、「介護を受けながら自宅」6.0%、「介護と介護サービスを組合わせて自宅」24.0%、施設入所32.0%、「現在入所中の施設」18.0%であった。

9年間で、介護状況では「必要時介護」の比率が低下し、「毎日介護」が増加した（図6）。将来の介護に不安を抱く割合は、25年以降徐々に減少してきた（図7）。不安の内容では「介護者の高齢化」の比率が減少し、「介護者の疲労や健康状態」の比率にも減少傾向がみられた。介護増大時の見通しでは、全体として自宅（N-1、-2）の比率が減少し、施設（N-3、-4）が増大した（図6）。

### D. 考察

東北地区のスモン患者数はこの9年の間に経年的に減少してきた。同様の傾向で来所検診者数が減少した

のに対し、訪問検診者数が増加または維持できたため、全体として検診受診率は増加傾向を示した。東北地区では21～23年度および27年度に受診率を高める方策を検討し、その効果は受診率の向上としてあらわれ、23年度と27年度にはピークを呈した。しかし、それらの翌年度にともなう受診率が低下したことは、受診率の維持・向上を意識した検診者側の継続的努力<sup>2)</sup>が必要であることを示している。

東北地区のスモン患者群の現状と動向を把握するために、私たちは毎年スモン検診を実施し東北地区の結果を分析してきた。ただし、受診患者群が毎年同一ではないため、調査結果がそのまま患者群の現状や動向を示すとは限らない。そこで、昨年度の報告書においては受診率の高かった23年度、26年、27年の3年度の調査結果を比較検討した<sup>1)</sup>。今年度は過去9年間の俯瞰して検討することによりスモン患者群の動向の把握を試みる。

検診受診者に占める85歳以上の比率が9年間で著しく増大しており、スモン患者群の現状や動向に高齢化が影響することは間違いない。また、併発症は極めて高率に生じており高齢に伴い累積もする。スモンの主要症状といえる視力障害、歩行障害、異常感覚、胃腸症状の4症状のうち、重症化の傾向がみられたのは視力障害と歩行障害であった。これは視力や歩行機能が加齢や併発症による影響を受けやすいためと解釈でき、この解釈は、頻度の高かった身体的併発症が白内障と骨折・脊椎疾患・四肢関節疾患があったことから支持される。高齢化や併発症の累積による重症化は、認知症の増加、長期入院・入所の増加、一人暮らしの比率の増加、日常生活動作の重症化、転倒ありの比率増加などからも読み取ることができる。

一方、介護については、介護度が増大する傾向とは逆に、介護への不安が減少しつつあった。一見矛盾する結果であるが、不安の内容で介護者の高齢化や疲労・健康状態の比率が減少したこと、および介護度が悪化した時の見通しにおいて在宅生活の維持が減少し施設への依存や期待が増大したことから、これらの変化は長期入院・入所や一人暮らしの増加と関連するかもしれない。もちろん、福祉制度の充実を反映している可能性もある。

大腿骨頸部骨折の発生は9年間でのべ573人にわずか1件であった(1.8件/1,000人年)。スモン患者の大腿骨頸部骨折に関する報告<sup>3)</sup>によると、昭和54～平成19年度の計24,187部の検診票に230件が記載されていた(9.6件/1,000人年)。対象群の母数、年齢構成および調査時期が異なりはするが、大腿骨頸部骨折頻度が加齢とともに著しく上昇すること<sup>4)</sup>を考慮すると、東北地区患者群の大腿骨頸部骨折が明らかに低頻度であった。低頻度の要因として転倒率の減少と、高齢化や併発症により行動量が低下し転倒の際に股関節部に強い衝撃が加わりにくいことが推察されるが、さらに検討を要するものと思われる。

以上のように、東北地区スモン患者の動向として、高齢化と併発症の累積、身体状況、日常生活動作および介護度の重症化、長期入院・入所と一人暮らしの増加、介護度は高まったが介護に関する不安は減少傾向にある、などが指摘できる。

## E. 結論

平成28年度の東北地区スモン検診は検診率が53.5%であり、女性が77.4%を、85歳以上が34.0%を占めた。東北地区スモン患者の動向として、高齢化と併発症の増加・累積、身体状況、日常生活動作および介護度の重症化、長期入院・入所と一人暮らしの増加、介護度は高まったが介護に関する不安は減少傾向にある、などが指摘できる。

## G. 研究発表

### 1. 論文発表

なし

### 2. 学会発表

なし

## H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

## I. 文献

- 1) 千田圭二 他：平成27年度東北地区におけるスモン患者の検診結果。スモンに関する調査研究班・平成26年度総括・分担研究報告書，p 52-55，2016

- 2) 千田圭二 他：東北地区スモン検診の検診率向上への再考．スモンに関する調査研究班・平成 27 年度総括・分担研究報告書，p 123-125，2016
- 3) 小長谷正明 他：スモン患者における大腿骨頸部骨折の解析．スモンに関する調査研究班・平成 20 年度総括・分担研究報告書，p 106-109，2009
- 4) 折茂肇 他：第 4 回大腿骨頸部骨折全国調査成績 - 20002 年における新規発生数の推定と 15 年間の推移．日本医事新報 4180：25 - 30，2004